

教科・領域における評価規準に基づく授業改善 －音楽科において－

和歌山市立本町小学校
教諭 酒井千佳

I はじめに

教育課程の改訂に伴い、音楽科においても、指導内容を精選し質の高い授業を積み重ねることがさらに必要となってきた。児童に教材への興味を持たせ、音楽活動への意欲を高めさせながら、音楽の本質に迫る学習はどうあるべきか、さらに、児童にとって成就感や満足感のある学習を実現しながら、楽しい音楽活動を進めていくにはどうすればよいのかなどを考えていく必要がある。本研究では、指導と評価のあり方を見直すことで、この課題を少しでも解決し、授業改善につなげたい。

II 音楽科で育てたい学力

1 学習指導要領にみる指導内容

平成10年7月、教育課程審議会答申の音楽科における改善の基本方針では、「児童生徒が楽しく音楽にかかわり、音楽活動の喜びを得るとともに、生活を明るく豊かにし、生涯にわたって音楽に親しむ」ことが示されている。実際の学習活動においては、表現活動及び鑑賞活動の関連を図りつつ、個性的、創造的な学習活動をより活発に行うことができるようにしている。

小学校音楽科の目標は、次のように示されている。

表現及び鑑賞の活動を通して、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育てるとともに、音楽活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う

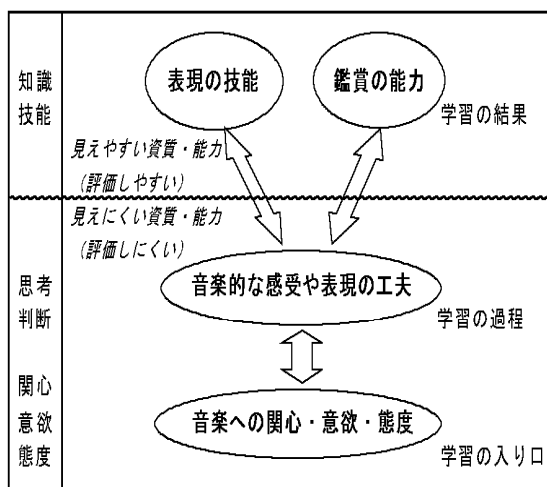
「心情」と「感性」の情意面と、「音楽活動の基礎的な能力」の能力面がともに育成されることで、「豊かな情操を養う」音楽科教育を目指している。

子どもたちが、歌を歌う、楽器を演奏する、音楽をつくる、身体表現をする、様々な音楽を聴くなど、多様で主体的な音楽活動を体験することは、音楽の能力を身につける基になる。教師が指導内容を単なる知識として理解させようとしたり、技能獲得にとらわれた指導をしたりすることは、この趣旨には沿わない。音楽をのびのびと表現したり、音楽を聴いて心を引かれたりするなど、子ども一人ひとりが感性を豊かに働かせながら、楽しい音楽活動を展開していく必要がある。

2 音楽科における学力の考え方

音楽科での学習過程を図1のように考えている。学習は、「やってみたい」「表現したい」という欲求や願いを持つことから始まる。そして、「このように表現したい」という思いを持ち、試行錯誤しながら表現を探っていくようになる。この活動の中で身につけた技能が、生涯にわたって使える能力である。

これまで、音楽科の学力は、技能や知識といったいわゆる『見えやすい学力』によって評価されがちであった。「美しい声で歌える」「リコーダーが演奏できる」「音符や休符の名前などを



(図1) 音楽科における学習過程

知っている」といった能力であり、音楽活動において必要な力である。しかし、図1に示したように、これを支えているのは、音楽に対する興味・関心・意欲や、音楽を受け止め表現に生かそうとする感受性である。これらは『見えにくい学力』であるが、音楽科で育てたい学力の中心であるととらえている。この力は、生涯にわたって音楽を愛好するのに不可欠な力でもある。

III 研究の内容と方法

1 評価の観点と方法

評価の観点は、次の4点である。

音楽への関心・意欲・態度…音楽に親しみ、音楽を進んで表現しようとする
 音楽的な感受や表現の工夫…音楽のよさや美しさを感じ取り、それらを音楽活動
 の中で創意工夫し、生かしている
 表現の技能…音楽を表現するための基礎的な技能を身につけている
 鑑賞の能力…音楽を楽しく聴取、鑑賞し、そのよさや美しさを味わう
 (国立教育政策研究所 「評価規準の作成、評価方法の工夫改善のための参考資料」より)

音楽は瞬間芸術といわれるように、音楽そのものは瞬時に消えてしまい、感覚のみが残る。そのため、即時に適切な評価をしなければ、効果的な指導や支援ができない。評価の方法としては、「観察」が中心となるが、一人ひとりの学習状況を十分に把握するためには、学習カードなどを併用することや、評価の時期を適切に設定する必要がある。

表1、2は、評価の方法と時期・観点の関係を示したものである。

評価の時期		授業前	授業中	授業後
評価の方法	観察	○	○	○
	活動の様子	○	○	○
学習カード	表現内容		○	○
	学習内容に関するもの	○	○	○
MD・VTR	自分を振り返るもの			○
	表現内容			○
対話・会話	発言内容・発表の様子			○
	グループでの練習の様子・話し合いの内容			○

(表1) 評価の方法と評価の時期

評価の観点		音楽への 関心・意 欲・態度	音楽的な 感受や表 現の工夫	表現の技 能	鑑賞の能 力
評価の方法	観察	○	○		○
	活動の様子	○	○		○
学習カード	表現内容		○	○	
	学習内容に関するもの		○		
MD・VTR	自分を振り返るもの	○	○		○
	表現内容		○	○	
対話・会話	発言内容・発表の様子	○	○		○
	グループでの練習の様子・話し合いの内容	○	○	○	

(表2) 評価の方法と評価の観点

2 教師が行う評価

教師が行う評価の視点としては、次の2点が考えられる。

子どもへの直接的な評価…授業中に子どもの表現や発言に対して、賞賛したり助言したりする
 次時の指導に生かす評価…授業記録や学習カードから子どもの実態を把握するとともに、教師が自分の指導を振り返る

(1) 子どもへの直接的な評価

評価したことを適切に子どもに返すことによって、学習の効果や効率を高めることができる。具体的に述べると次のようになる。

ア 子ども表現を紹介する

学級全体に、学習のねらいに沿った子どもの表現を紹介する。一緒に活動している子どもの表現は、他の子どもたちにとって、興味深く、身近な目標や参考に

なり、活動の見通しを持たせることになる。

イ 曲想と結びつけた言葉かけや働きかけをする

教師は、子どもの活動に対して「がんばりましたね」と言葉かけをすることがたびたびある。努力やひたむきさを評価することは大切だが、それだけでは、音楽的な表現の伸びは期待しにくい。子どもが表現したいと思ったことや曲想と実際の表現を関連づけて評価する必要がある。「みんなの夢の世界が見えてきそうだよ」というような情景や曲想を意識した言葉かけや、「マレットを替えたら弾んでいる感じになったね」というような子どもの工夫に対する言葉かけである。このような評価を積み重ねていくことで、子どもたちは初めて出会う楽曲や友達の演奏に対して、情景や気持ちを思い浮かべたり感じ取ったりして、表現を工夫するようになる。

(2) 次時の指導に生かす評価

授業中の評価は「観察」が中心になるが、これだけでは不十分である。そのため、記録として残る評価方法を工夫し、授業後に分析する。子どもの実態を把握することができ、自分の指導をふり返ることもできる。また、授業中に行った評価と合わせて、次時の授業改善を図る。

ア 学習カード

子どもの気づきや心の動きなどを把握するために、学習カードを活用する。学習カードは、学習内容に関するものと自分をふり返るものの2種類のカードを用いる。カードの活用にあたっては、次の3点に留意する。

- ①形式的にならないように、毎時間記録することはしない。
- ②書きたい内容が見つかったときや自分の変容に気づいたときに書く。
- ③評定尺度形式のものではなく、記述式にする。

イ 機器活用による記録

VTRやMDなどの機器活用により、子どもの変容をとらえる。次のような場面を中心に記録し分析する。

- ①歌唱や器楽表現の場を記録し、表情や演奏の仕方、表現内容について分析する。
- ②話し合いの場を記録し、発言内容や挙手の状況を分析する。
- ③グループでの活動の場を記録し、練習の様子や話し合いの内容を分析する。

3 子どもが行う評価

自己評価を行うことで、表現力が高まる。しかし、自己評価を繰り返すうちに学習のねらいとのずれが生じたり、表現の工夫ではなく取組の態度のみに目が向いたりすることがある。そこで、友達との関わりを通して自分をふり返るようにすることで、表現を高めようとする姿が期待できる。自己評価カードだけでなく、表現についての気づきをメモしたり、グループ活動の進み具合を黒板に表示したりして、自分の学習状況を認識することによって、自分の成長や課題を意識することができる。

4 カリキュラムに生かす評価

学習指導要領では、指導内容に関する全ての事項が2学年単位で示され、各学校が実態を考慮し計画的に指導することになっている。2年間でどのように積み重ねていくかを考えるには、6年間を見通した構想を立て学習内容の系統性や連続性、発展性について検討し、各学年の年間指導計画及び題材と評価規準の対応表を作成する必要がある。音楽のよさや美しさを感じ取り、生涯を通じて音楽とふれあっていこうとする心情は、1時間の授業だけで育むことはできない。題材やカリキュラム全体で、子どもの育ちを評価していく視点が必要である。学習カードやVTR、MD等を題材ごとにまとめた記録が評価資料となる。これは、教師の授業改善に役立つとともに、子どもが自己の成長を実感し、自己肯定感や次の活動への意欲を持つことにもつながる。

Ⅳ 授業実践について

－ 3 年 題材名「音と音を合わせると」－

1 授業の概要

- (1) 期間 平成 15 年 10 月 24 日（金）～ 11 月 7 日（火）
- (2) 対象 和歌山市立本町小学校 第 3 学年 26 人
- (3) 題材名 音と音を合わせると

本題材は、アンサンブル活動をねらいとしている。歌にオブリガートを加えたものや交互唱、器楽合奏で音を重ねることを経験し、互いに聴き合いながら演奏することを楽しむ。また、グループで、楽器の組合せなどの表現方法を考え、曲想にあった表現を工夫していく。

(4) 題材目標

自分の声や楽器の音色に気をつけながら、声や音を合わせる楽しさを感じ取って、合唱や合奏を楽しむようにする。

(5) 本題材での評価

＜内容のまとまりと評価の観点＞

本題材では、子どもが自分で考え工夫し、それを表現し、聴き合うという活動が中心となる。その活動内容や場面に応じて、個人に対する評価とグループに対する評価、自己評価と相互評価を使い分けていく。これらの評価では、子どもたちが自分たちで表現を工夫できたという喜びを感じられるようにしたいと考えている。

評価の観点 内容のまとまり	態度・意欲・関心	音楽への関心	音楽的表現の能力	表現の技能	鑑賞の能力
A表現歌唱	○	○	◎		
A表現器楽	○	◎	◎		
A表現創作			○		
B鑑賞					

◎…重点的な内容 ○…関連的な内容

＜題材の評価規準と学習活動における具体的な評価規準＞

ア 音楽への関心・意欲・態度

題材の評価規準	音を重ねる活動に関心を持ち、楽しく合唱や合奏に取り組もうとしている
学習活動における具体的な評価規準	①互いの声を聴き合いながら、声の出し方に気をつけて部分二部合唱に取り組もうとしている ②歌詞に親しみ、進んで歌おうとしている ③楽器の音色や組合せに関心を持って進んで演奏に取り組もうとしている

イ 音楽的な感受や表現の工夫

題材の評価規準	声や楽器の音色を感じ取って、音の組合せやバランスを工夫して表現している
学習活動における具体的な評価規準	①互いの声を聴き合いながら、声の出し方やバランスに気をつけて部分二部合唱をしている ②ほろ馬車の進む様子を思い浮かべながら、拍の流れにのって、演奏している ③音の重なりや響きを感じ取りながら、演奏を工夫している

ウ 表現の技能

題材の評価規準	互いの音を聴き合い、正しい音程で歌ったり、楽器の演奏の仕方に気をつけて演奏したりしている
学習活動における具体的な評価規準	①リコーダーの運指を理解し、タンギングや音色に気をつけて演奏している ②楽器の音色やバランスに気をつけながら合奏している

(6) 題材の指導計画及び評価計画（全 9 時間）

※検証授業として、第 2 次 6 時間分を指導 第 1 次分は省略

時	学習のねらいと学習活動（○学習活動）	学習活動における具体的評価規準と評価方法
第 2 次	音色の組合せを決めて合そうしよう（6 時間） 〈ねらい〉 歌声や楽器の音色、それらを組合せた音の響きを感じ取りながら、演奏の工夫をして楽しく音楽活動に取り組むようにする	〈教材〉 ガタゴトほろ馬車
1	自分の声や楽器の音色に気をつけながら、声や	・歌詞に親しみ、進んで歌おうとしている

	音を合わせる楽しさを感じ取って、合唱や合奏を楽しむようにする ○範唱CDを聴き、ほろ馬車の様子を想像する ○範唱CDを聴きながら歌詞唱する	(アー②) 観察
2	主旋律をリコーダー奏できるようにする ○輪唱する ○階名唱する ○リコーダーで旋律奏する	・リコーダーの運指を理解し、タンギングや音色に気をつけて演奏している (ウー①) 観察・学習カード ふり返しカード
3	拍の流れに合わせてリズム伴奏ができるようにする ○輪唱や、リコーダーによる輪奏をする ○リズム伴奏を練習する ○リズム伴奏を練習し、旋律と合わせる	・ほろ馬車の進む様子を思い浮かべながら、拍の流れにのって、演奏している (イー②) 観察・ふりかえりカード
4	拍の流れに合わせてリズム伴奏ができるようにする ○リズム伴奏を練習し、旋律と合わせる ○グループで演奏の仕方を話し合う	・楽器の音色や組合せに関心を持って進んで演奏に取り組もうとしている (アー③) 観察・発言・学習カード
5	グループに分かれて、音色の組合せや演奏の仕方を工夫し、ほろ馬車の様子にあった表現ができるようにする ○話し合ったことをもとに合奏の練習をする ○音色の組合せや楽器の奏法を工夫する	・音の重なりや響きを感じ取りながら、演奏を工夫している (イー③) 観察・演奏・学習カード ふりかえりカード
6	各グループの演奏を聴き合い、音の重なりや響きを感じ取れるようにする ○演奏を発表し、互いに聴き合う	・音色やバランスに気をつけながら合奏している (ウー②) 観察・発表・ふりかえりカード

2 検証授業の考察

(1) 評価規準ウー①について（第2次2時間目）

評価規準ウー①
リコーダーの運指を理解し、タンギングや音色に気をつけて演奏している
＜評価の方法＞観察・学習カード・ふり返しカード

学習のねらい：主旋律をリコーダー奏できるようにする

ア 授業中

評価規準に設定した「運指」「タンギング」「音色」について観察した。「運指」「タンギング」は、おおむね満足の状態である。しかし、「音色」について指導の必要があると判断した。この曲で初めて出てくるミ（一点ホ）の音は息の強さに注意しないと裏返ってしまい、うまく鳴らない。指使いに気をとられて、音色に注意が向いていない子が多かった。



そこで、自分の出している音をよく聴くように言葉かけをすると、丁度よい息の強さを調節するようになった。単音ならきれいな音が出るようになったが、曲になるとうまくできない子が半数いる。そこで、フレーズ中の難しい跳躍部分を取り出し、反復練習させた。ゆっくり吹いたり速く吹いたりしているうちに、音色が安定してきた。息の調節を体得したようである。

「おおむね満足」と判断した子どもは、26人中20人だった。

イ 授業後

学習カードを提出しているのは、26人中16人である。この16人は授業中に「おおむね満足」と判断した子どもと重なっている。学習カードを持ち帰った10人は、自主練習しようとしており、意欲的に取り組んでいるととらえられる。

ふり返しカードからも活動に満足していたことがわかり、学習意欲の面では「おおむね満足」と評価できる。「ミの音がふけるようになった」という記述からは音色に気をつけて演奏していたことがわかる。

授業中に「努力を要する」と判断した子どもたちについては、次時でもこの評価規準を継続する必要がある。

ウ 第2次3時間目

3年 名前 ()

ガタゴトほろ馬車のまきんりつ



	練習の回数	自分で	友達から
ア	4	9	0
イ	1	0	0
ウ	3	0	0
エ	2	0	0

①ア、イ、ウ、エのどのふしから練習するか決める
 ②まず一人で練習する。できたところに○をつけよう
 ③友達にきいてもらおう。友達に○をつけてもらおう
 ④なんふのふしを続けてふけるかな



本時の学習活動の中心はリズム伴奏であるが、リコーダー奏の学習活動を短時間行った。前時に学習カードを持ち帰った10人全員がカードを提出したので、この10人を中心に観察する。前時に比べて音色に気をつけているのがわかる。フレーズのまとまりとしても演奏できるようになっているので、「練習の成果があったね。ほろ馬車がいい感じで走れるね」と言葉かけをする。演奏に対する自己評価は、

- ・できた：1人
- ・ほぼできた：13人
- ・まだ練習したい：12人 である。

教師は、「おおむね満足」と判断したが、まだ練習したいと自己評価している子どもが12人いた。その理由は「すらすらふけないから」「間違うから」「変な音が出るから」であった。子どもたちは、「こんなふうに演奏したい」という思いを持って取り組み始めているのだと感じた。

習熟の時間が必要だと考え、次時もリコーダー奏の時間をとることにした。

エ 第2次4時間目

リコーダー奏の後の自己評価は、

- ・できた：13人
- ・ほぼできた：8人
- ・まだ練習したい：5人 である。

「まだ練習したい」と自己評価している5人は、はじめに「努力を要する」と判断した子ども6人の内の5人であるが、友達にきいてもらったり、家庭練習したりして「おおむね満足」と判断できる。「まだ練習したい」の子どもには、もっとうまくなりたいと感じている子どもとまだ自信がない子どもがいると思われた。個別に声をかけ、よくなった所と意欲的に練習した態度を賞賛した。次時からはリコーダー奏の時間は特にとらないが、この5人については機会を見つけて言葉かけをしていきたい。学級全体には、「リズム伴奏と合わせ

《ふり返しカードより》

＜カードを提出した16名＞

- ・ふけて楽しかった。ふえでりんしょう（輪奏のこと）もしたいな
- ・ミをふけるようになった
- ・そんなに簡単じゃなかったけどできました

＜カードを持ち帰った10名＞

- ・K君のおかげでできました
- ・無理と思ったけどできてうれしい
- ・ミができなかったんだけどやっとできた



て、合奏できるようになってきたね。いいほろ馬車ができそうだね」と言葉かけをし、本時のリズム伴奏の練習に入った。

(2) 評価規準イー③について（第2次5時間目）

評価規準イー③ 音の重なりや響きを感じ取りながら、演奏を工夫している
＜評価の方法＞観察・演奏・学習カード・ふり返しカード

学習のねらい：各グループで、音色の組合せや演奏の仕方を工夫し、ほろ馬車の様子にあった表現ができるようにする

ア 1班

リコーダーの旋律奏に歌を加えて曲の感じを表現する工夫をしている。C児が中心となって楽器の奏法を工夫し、全員で試している。何度か演奏しているうちに、だんだんテンポが速くなり、演奏がバラバラになってきた。速さを工夫させるために、「ほろ馬車はそんなに速く走っても大丈夫かな。みんなのほろ馬車の走る速さはどんなの？」と言葉かけをした。

⇒教師の言葉かけによって、いろいろな速さで演奏しはじめた。鈴の速さが安定することによって、演奏がまとまっていった。この様子から、音の重なりや響きを感じ取って演奏しているととらえられた。

ふり返しカードには、自分の演奏だけでなく友達の演奏も聴き、グループとしての演奏を意識した記述が見られる。活動の中で楽器の選択や奏法について考え、演奏を工夫していたことから、「おおむね満足」と評価した。



《ふり返しカードより》

- ・ガタゴトほろ馬車に入ってなかった楽器をアドバイスもらった
- ・ぼくとD君が歌だったけど、Cちゃんが鈴も入れたらと言って入れたら結構よかったのでCちゃんってすごいなと思いました
- ・楽器で、いきがあってできるようになった
- ・Cちゃんにウッドブロックのやり方とか教えてもらってみんなで演奏できてよかった
- ・歌と鈴にしたことがいい所です
- ・とってもいい合奏ができあがったよ。みんないきが合っていたし、よかったよ

イ 2班

E児は、膝でリズムをとり、感じ取った曲想を体全体で表している。他の子どもたちにも曲想を感じながら表現させたいと思い、「E君、まるで馬に乗ってるみたい」と言葉かけをした。

⇒教師の言葉かけに、全員笑って「ほんとや」「馬の感じ」「ほろ馬車進め！」といって和やかに演奏している。心地よいE児の演奏にのって、他の子どもたちも演奏している感じである。言葉による対話はないが、演奏が終わると「もう一回しよう」といって何度も練習を繰り返していた。

ふり返しカードの記述からは、子どもたちが活動に満足していることがわかる。言葉ではなく互いの音を聴き合うことで、自分たちの演奏をよりよいものに工夫することができたのととらえ、「おおむね満足」と評価した。

語彙の少ない子どもたちは、身体表現していることが多い。E児の音楽の感じ方がそうであった。教師の言葉かけによって、E児の感じ方を共有でき、個々が曲想を意識して演奏するようになった。

《ふり返しカードより》

- ・合奏がじょうずにできた
- ・合奏の練習をした。じょうずにできたこと
- ・合奏ができてとても楽しかったです
- ・小だいこがうまくなった
- ・リコーダーがじょうずにふけてうれしかったです
- ・楽器でえんそうしてみると楽しかった
- ・最初はむずかしかったけどできるようになりました

ウ 3 班

主旋律を木琴と鉄琴で輪奏しようとしているが、演奏がまとまらず、表現を工夫するまでに至らない。このまま活動が続けていては限られた時間で合奏ができないと判断して「みんなのほろ馬車はこの楽器の音でいいのかなあ」「もっとびったりする音色があれば変えてもいいんだよ」と言葉かけをする。

⇒「これでいいよ」と子どもたちは、一心に活動が続けている。一番苦勞していた鉄琴のG児は、演奏する鍵盤を友達に示してもらいながら練習し、本時の終わりには、旋律奏ができるようになった。しかし、演奏の仕方や音色を工夫する活動まではできず、次時の課題となった。

ふり返りカードには、どの子も担当する楽器を演奏できた喜びを表している。子どもたちは、楽器で演奏する楽しさを味わえた。教師がもっと強く言葉かけをして、楽器を替えるよう指示していたなら、子どもたちは表現しようとする意欲を失っていただろう。特にG児は、「鉄琴ができるようになったよ!」と、ふり返りカードにできた喜びを表している。表現しようと思うからこそ、得られた技能である。

この班の活動は、前時の評価規準アー③で見ると十分満足できる。しかし、本時の評価規準では、まだ達成できておらず、次時も継続していく必要がある。

(3) 題材全体を通して

評価規準に照らして観察していくと、子ども個々のこだわりに気づくことができた。落ち着きなくいろいろな楽器を試していたH児について述べたい。H児は、楽器を次々と替え、大きな音を出していた。それは、本時のねらいに迫る活動ではなく、楽器の音を出すことを単に喜んでいるようにみえた。ある時、H児が「先生、馬が走ってるみたいいきこえる?」と話しかけてきた。また、グループ活動においても「(演奏の速さが)速すぎて馬車が転ぶ」と情景と絡まった発言をしていた。これらのことから、H児は楽器を替えていくことに興味を奪われていたのではなく、ほろ馬車のイメージを持って楽器を試していたのだとH児の内面を推しはかることができた。

ふり返りカードからも、子どもの内面を見ることができた。リコーダー奏にこだわったI児は、階名がわからず立ち歩いていた子どもである。リコーダーをうまく吹けるようになりたいという願いをずっと持っていたことが、ふり返りカードからわかる。I児は、グループの友達との合奏活動の中で速さや出だしの工夫をしながら、いつもリコーダーの上達を願っていたのだ。「こんなふうリコーダーを演奏したい」というイメージを持って練習していたはずである。願いが目標となり活動につながることをI児は示してくれた。観察だけでは、I児の願いに気づかず、本時の目標についての言葉かけだけをしていたであろう。ふり返りカードを使用することで、I児の願いに気づき、リコーダー奏について評価を返すことができた。

また、評価規準に照らしてグループの活動を観察していくと、学習過程が見えてきた。この過程が見えてくると、子どもたちが本時のねらいから少し離れた活動をしていても、やがて目標に沿った活動に戻ってくることが予測でき、ゆとりを持っ

《ふり返りカードから》

- ・合奏をしてとても楽しかった
- ・楽器で合奏して最後までできてうれしかったです
- ・合奏で木琴が上手にできてうれしかった
- ・鉄琴ができるようになったよ!
- ・友達がこっちにした方がいいと言ったのでその通りにするとできた(ウッドブロックの構え方)
- ・小だいこができた。ちょっとじょうずになった

I 児のふり返りカード

【】内は本時の主な学習活動

- 10/28【リコーダーによる旋律奏】
あまりふけなかったけどとても楽しかったです
- 11/6【リズム伴奏】
リコーダーがちょっとふけた
- 11/7【グループでの合奏の工夫】
リコーダーがじょうずにふけてうれしかったです
- 11/11【合奏の発表と鑑賞】
いい思いができました

て待つことができた。

3 授業を行うことで見えてきたこと

(1) 事前

年間指導計画や題材計画作成の際には、これまでも子どもの実態や反応を思い浮かべながら計画してきた。今回、評価規準を吟味し設定することにより、予想される子どもの反応を文章で表すことができ、授業で育てたい力をより具体化することができた。また、必要な支援を予想し、精選された授業設計ができた。



(2) 授業中

表現活動をしているとき、子どもは、自分の表現を把握し吟味することが難しいため、教師の働きかけが必要になる。その働きかけは、二つ考えられる。一つは、賞賛や承認のような子どもの意識に沿うものである。この働きかけによって子どもの自己肯定感を高め、意欲を引き出すことができた。もう一つは、子どもの意識を少し変えるものである。子どもが無意識に活動していることを教師が言葉にして返すことで、子どもは意図を持って活動し始めた。また、個人の気づきをグループで共有させることもできた。これは、子どもが新しいことに気づき、もっと工夫しようとする支援となった。

教師の側には、評価規準をはっきりさせることで、ねらいに沿った指導や助言を考えられるようになると同時に子どもを待つ姿勢や見つめようとする姿勢が生まれた。また、指導計画の段階で、努力を要すると判断される子どもに対する手だても含めて考えておくことで、場面に応じた効果的な指導が可能になった。

(3) 事後

努力を要すると判断せざるを得ない子どもに対して、教師がその原因を考え、次の授業展開に生かすことができた。また、その評価規準を持って、継続的に指導を続けていくようにすることで、全ての子どもがおおむね満足の状態に成り得た。設定した評価規準を継続させることによって、子どもたちに確かな力をつける授業展開ができたと考える。



(4) グループに対する評価

グループとして、めあてに沿った活動ができているのか、どのような学習過程にあるのかを把握することができた。また、グループに対して評価することで、個人に対する評価がこれまで以上に可能になった。グループの様子を思い浮かべ、その中で個人がどう動いていたかをふり返ると、個人の様子をよりよく把握し評価することができた。

(5) 自己評価・相互評価

学習カードの使用により、子どもが自分の学習手順や進み具合を自覚し、学習を進めることができた。教師は個人やグループの学習の進捗を確認し、その段階に応じた言葉かけができた。

音楽ふりかえりカード 11月 7日

3年 名前()
だいたい名(カクゴト)はうばし

①～④から一つ番号を選んで書こう

①楽しいことがあった
②できるようになったこと
③友達からこんなアドバイスをもらった
④友達のいいところを見つけた

ふりかえったこと

④ きうはぼくと くんと
歌うたけど ちゃん
がすきいれたいといえ
た。みんながたの
しみはすきいと思いました

ふり返しカードでは、子どもたちは、よくなった点や楽しかったことなどを短い文の中に表現できていた。教師は、事後に分析することにより、その子どもの思いを把握することができた。また、ふり返しカードの中に「友達からこんなアドバイスをもらった」「友達のいい所を見つけた」という項目を設けることによって、友達との関わりの中で、自分の進歩を自覚することが多く見られた。一方、「リコーダーがふける」「合奏ができる」など、自分の技能面だけをふり返っていると感じられる自己評価もあり、自己評価の観点を子どもと共に考える必要も感じた。

V 終わりに

音楽にはいろいろな表現方法があり、一つに限定することはできない。教師の考えた表現の仕方を教え込むのではなく、個々の子どもが自分の考え方を音楽に表現できるように、柔軟に指導していくことが必要である。そのためには、子どもの学びの道筋を理解しておかねばならない。

これまでも、子どもの反応や行動を観察しながら授業を進めてきたが、特に指導の必要な子どもや技能の優れている子どもに評価の目が向けられることが多かった。これは明確な評価規準が設定されていなかったことも一因と考えられる。たとえ評価規準が設定されていても、1時間の授業に複数設定されていると、教師の視点が評価にのみ向いてしまう危険性がある。そこで今回、評価規準の設定を1時間に一つに絞ることで、子どもの学習状況がよく見えるようになると同時に、子どもの学びの道筋を理解できるようになった。

子どもにとっては、教師の言葉かけそのものが評価になり、学習活動に最も影響を与えるものである。教師の言葉が知らず知らずのうちに、音楽活動に対する子どもの価値観の形成に影響している。子どもが自分で見つけたものや、苦勞して獲得したものは、生涯を通じて使える力になる。そのため、教師が子どもの活動を辛抱強く見守るべき時がある。一方、きちんと教えてその子の力にすべき時もある。その見極めのために、適切な評価規準の設定が有効であった。

今回の研究では、評価規準を設定することにより、指導内容が精選され、子どものよさや可能性を引き出すことにつながった。今後も実践を重ねることで、評価規準や評価方法の妥当性と信頼性を高めたい。

自分の思ったことを大切にし、よりよいものを求め、生みだし、工夫していく態度を育てたい。これは、よりよい生活をしていくために自ら工夫していく力であり、人と交流しながら互いに高まっていくとしようとする力、つまり生きる力であると考えている。今回の研究を生かし、今後の音楽科のあり方についてさらに研究を深めていきたい。

<主な参考文献>

- | | | |
|------------|---|---------------------|
| ・教育審議会答申 | 『幼稚園、小学校、中学校、高等学校、盲学校、聾学校及び養護学校の教育課程の基準の改善について』 | (1998) |
| ・文部省 | 『小学校学習指導要領解説 音楽編』 | (1999) |
| ・文部省 | 『小学校学習指導要領解説 総則編』 | (1999) |
| ・教育審議会答申 | 『児童生徒の学習と教育課程の実施状況の在り方について』 | (2000) |
| ・国立教育政策研究所 | 『評価規準の作成、評価方法の工夫改善のための参考資料』 | (2001) |
| ・和歌山県教育委員会 | 『小・中学校評価規準例』 | (2002) |
| ・金本正武 | 『新しい教育課程の展開 小学校音楽』 | 東洋館出版社 (2002) |
| ・西澤昭男他 | 『音楽的教育における「不易」と「流行」』 | 教育芸術社 (2002) |
| ・文部科学省編 | 『教育用音楽用語』 | 教育芸術社 (2002) |
| ・梶田勲一 | 『教育評価 (第2版補訂版)』 | 有斐閣双書 (2002) |
| ・舟山美知他 | 『児童生徒の資質や能力を高める指導と評価に関する研究』 | 岩手県立総合教育センター (2002) |
| ・中村 隆他 | 『授業の工夫改善につながる学習評価』 | 京都市立永松記念センター (2002) |